

第5章 船上生活と子供たち

1 節 藤川 美代子

2 節 田上 繁

1 節 子供たちの日常生活

はじめに

船上にあるのは、船を暮らしの糧としながら水上労働に従事する大人たちの姿だけではない。職を求めて各地（多くは西日本）から若松港へと集まった船上生活者の多くは、故郷から子供たちを連れてきており、船上で共に暮らした経験を有している。子供たちは、ペットの犬や伝書鳩を飼い、石炭を運ぶ親の手伝いをしたり、外国船の乗組員たちと物のやりとりをしたりと、船上でも自分たちの豊かな世界を作り上げていた。こうした懐かしさを伴う思い出の一方で、船上で幼少期を過ごしたことのある人たちの大多数は、自分の兄弟姉妹を落水事故や船上での事故で亡くすという辛く耐えがたい事態を経験している。本章の第1節では、1940～60年代に子供時代を過ごした人たちの語りをもとに、船上で繰り広げられていた子供たちの日常生活の一端をうかがってみることにする。

(1) 船上での暮らし

①船に住まう

石橋英子さん（昭和21年生）の父親は愛媛県、母親は高知県出身であった。父は貝島炭鉱に就職するために愛媛県から福岡県へ出て来た。しかし、戦争で腹部に3ヶ所もの大きな傷を負っていたために、炭鉱の面接試験に合格できず、舩に乗り始めたのだという。両親は、初めは第一港運の「三三七若丸」という木製の船に乗っており、その後、第一港運が初めてクロブネ（＝鉄船）を造ると、「一号若丸」と呼ばれたその鉄製の舩で石炭を運ぶように

なった。舩に乗っていたという洪田幸子さん（昭和20年生）は、広島県出身の父親と、山口県下関市出身の母が豊洋海運や山久運輸といった会社に所属しながら、「双葉丸」という名前の舩を操縦していた。英子さん、幸子さんどちらの場合も、両親共に海や船とはまったく無関係の仕事しかしたことの無い人であった。

いずれの舩も、オモテ（＝舩先のほう）に居住空間があり、トモ（＝舩尾）に舵があるという造りで、その中間にプールのように深く掘り下げられた「ドウノマ」あるいは「ダンブロ」と呼ばれる大きな空間があり、そこに石炭を積むことができるようになっていた。居住となる部屋の傍らには石炭で焚く四角形や円形の木製の桶風呂が据えられ、周囲に目隠しなどをして家族が順番に風呂に入ることができた。真水は、両親が空のドラム缶を積んだ伝馬舩でオカ（＝陸地）の給水所へ買いに行ったり、船倉に水を入れたタンクを積んだ大きな伝馬舩を操縦する「ミズウロ」さんを舩へ呼び、ホースを互いの舩のタンクに渡して水を入れてもらったりして手に入れていたという。舩での生活は、オカでのそれと比してもそれほど不便なものではなかったというが、子供たち、特に女の子たちにとって最も恥ずかしかったのは、船上での用足しだった。トイレは、舩上部の外側に張り出した部分に設けられており、直接海に落とす造りだったという。

洪田幸子さん（昭和20年生）

問題はトイレよね。ほっほっほっほっほ。トイレね、船があるでしょう。そしたらね。この船のね、横にね、こう小さなそれこそなんていうんかね、この箱みたいな、をこうつ

けてて、ほいでこう。ほいでこれが取り外しが
できるん。ほいで、ここに、あのなんていう
か、こう、これが、カネ（＝金属）の。ほい
で、あの一、荷役をする時は、それ外さんと。
へちャけるでしょ。だから、その外しとくんで
すよ。じゃけ、もう荷もなんもなくなって、時
にはこうして、トイレをこうしとく（＝つけて
おく）んですよ。やけ、この箱の中でするん
ですよ。そやけ、そうですね、あの、踏板が二
つある、右と左とあって。で、もうそのままこ
う、うん。それが一番好かんやったですね。好
かん好かん（2011年8月2日）。

石橋英子さん（昭和21年生）

こっから（＝トイレから）上が見えた。こっ
からはね、もう下も見えるからね。真ん前で
見たらねえ（丸見えになる）。ようあんな生活
やってたよねえ。だから、プライベート・ルー
ムがプライベートなもんじゃないんだよね。
ご披露してから、あの、あれって感じだった
ね。やだったね、ほんと。トイレはほんとにや
だった。漁船っていうのは、（中略）こんなに
海から、あの4～5メートルも高くない
でしょ。それがね（背の高い舢舨の場合だと）、
だから、自分のその排泄物がね、ほんとに人
に見えちゃうから。ねえ。若い女の人でね。だ
から、お部屋の中で処理したものを、そのそこへ
ね。そうしてたんですよ。（中略）そこで
する訳いかないでしょ（2011年8月2日）。

こうした船上での用足しの状況は、周囲のオカの
人たちにも知られており、子供同士の喧嘩の時には
オカの子供たちがそれをからかうこともあったのだ
という。

田上實さん（昭和11年生）

わたしが藤ノ木、若松の市内から藤ノ木に移
る頃ね、小学校は藤ノ木小学校と古前小学校に

分かれとったの。そしたら、わたしは藤ノ木小
学校。ところが、その古前のほうと喧嘩が始
まったんですよ。ほんと昔は、しょーっちゅ
う喧嘩がありました。小学校同士が。その時
にね、（自分たちが）古前小のほうに浴びせか
けるのは何かっていったらね、「ポッテーン、
ポッテーン」ちいいよった。ほしたら、相手が
怒ってね。なんのことかっていったらね、（彼
らは）船の上からうんちするから、「ポッテ
ーン、ポッテーン」って、そんな時代ですよ。
「ポッテーン」って。（中略）相当ね、子供が
ね、船乗ってる子供が古前に多いでしょう、
だから、そういうふうに、「ポッテーン、ポッ
テーン」って喧嘩するんだもんね。ほいで、
（相手は）かちーんて。うんちが下に落ちる、
ポッテーン、ポッテーン（2011年8月2日）。

舢舨は、基本的には石炭を積むものだったが、ほか
にも大型の外国船が入港して接岸できない時に海上
で大豆などを受け取り、それを岸へ運ぶという作業
をすることもあった。

石橋英子さん

大豆を積んだらですね、荷揚げした残りって
いうのが、その船の持ち主の余禄になって、そ
れを集めてですね、あの一、オカの豆腐屋さん
のところに持って行ったら、豆腐とこう交換して
くれる。要するにですね、外国船とかから、大
豆を積んだ船が来るじゃないですか。したら、
舢舨船が、その外国船に横付けして、こう荷を積
むでしょう。したら、その荷を今度また、今の
あの一、陸上のトラックの役割ですよ。（中
略）そのどっかのね、港に持って行って、荷揚
げする訳ですよ。ほたら、荷揚げした残り、
きれーに、その全部揚げられないじゃないです
か。こう、残る訳ですよ、大豆が。そいで、
持って行きよう時に、わたし、海に落ちてね。
いや、だって豆は…それが怒られてね。それで

結局一つは離しましたよ。で、母がちょうど、箱みたいなのがたまたま横にあったみたいで、それをね、さっとやってくれたので、それにつかまって、あの一、今があるんです（2011年8月2日）。

こうして大豆を積んだ外国船や、石炭を積むためにやって来た外国船が入港する時には、外国船の乗組員たちと船上で暮らす子供たちとの間では無言のやりとりも交わされ、子供たちにとっては楽しみも多かったという。

洪田幸子さん

わたしはあの、こんな思い出があるんですけれどね。外国船が入ってくるじゃないですか。そしてあの一、うちの船からその石炭をゴンゾウさんがなんか、こう。うん、あの一、本船のね、その一、ところに帰る時、やっぱり外国の人がこう珍しそうに見るんですよ、子供が船に乗っ取るもんで。そで、いつか手振ったらですね、チョコレートとかガムとかですね、投げてくれるんですよ。チョコレートなんかもうあの頃食べられないじゃないですかあ。そやけえ、ものすごいおいしかったですよ。それとか、肉の塊とか投げてくれよったですよ。はい、生肉をですね（2011年8月2日）。

石橋英子さん

わたしもね、こんな思い出をね、（中略）焼きおにぎりをね。それをね、その外国船の人がね、その一、くれっていう訳。んで、悩んだ挙句、あげたら、その、あなた（＝洪田さん）がね、もらったみたいに、チョコレートとか缶詰とかねえ、なんか。ね、もらったよね。うれしかったー。それから何回も（焼きおにぎりを）焼いたけど、一度もそれからは。来なかった。一度きり（2011年8月11日）。

舳の多くは木造であったことから、雨が降ると船の板の節目から真水が入ることで板が腐ってしまう可能性があり、それを防ぐために、海水で船を洗う必要があった。また、船底の外側の板から小さな牡蠣やフナムシが船に入り込むのを防ぐために、船の底の部分を定期的に洗浄しなければならなかった。子供たちも、そうした作業を手伝うことがあったという。

洪田幸子さん

そう。わたしはツルベちゅうんかな、あれでから、（海水を）こう上げて、うん、シャーち流してやりよった。ほして、兄貴がこう、ボウズリちゅうですよ、ボウズリで擦って。（船の底の）牡蠣を、牡蠣を、ついとるけ、それを落とすんですよ（2012年8月7日）。

②船上で遊ぶ

舳の中には石炭を積んで若松から瀬戸内海のあたりまで行くものもあり、数日もの間、陸へ上がることのできないこともふつうだったため、船上に暮らす子供たちにとって、船は生活の場であると同時に、遊びの場ともなっていた。両親が熊本県水俣市出身で、小学校5年生ぐらいの時に両親や兄弟と共に若松へ移動して舳に乗っていたという田上キサ子さん（昭和17年生）も、普段は石炭を積んでいるドウノマで真っ黒になりながら遊んだことを覚えているという。

洪田幸子さん

そいで、なんも遊ぶもんがないでしょう。だから、ダンブロで素麺か小麦粉かなんか持ってきて、みんなで、兄弟、水で練ってですね、粘土にしたり何か作ったりなんかして、そんなんして、何日間して姫路まで行ったんですよ（2012年8月7日）。

石橋英子さん

釣りに行ってましたよ。わたしが子供の頃、小学校の頃。サヨリとか。(中略) だから、小学校の3年過ぎからかなあ、(中略) 泳いじゃいけなくなった。(海に) 入ると、おっさんが、そこで泳いでる子供はあかんぞって怒って。(それまでは) 泳ぎたい時は、部屋の中でパッパッと脱いで、すぐにその船の中からボチャンと。はははははは、少しは泳げるんですけどね。今は(海水が) きれいなんですよ。一時すごく汚かったですよ。汚水とかどンドン流してたじゃないですか、制限もなく。子供の頃ですね、一番怖かったのはですね、ドザエモンがすごく浮遊してたんですよ。そうなんですよ。自殺とかそんなじゃなくて、夜とかね、酔っ払ってオカに呑みに行って、海に帰ってきて、船に帰って来た時に足踏み外して落ちてですね、流れちゃったとかですね。なんかねえ、ブヨーンってね、ふやけてっていうか。怖かったですよ(2011年8月2日)。

田上キサ子さん

そいで、その、もう楽しいことっていったら悪いけど、航海しよる時に、あの一、場所に行くまでに、あの一、一回、ここで泊って休みにしますからって、お休みにしとったら、小さい伝馬船っちゅうのがあるんですよ。それにね、そこらへんにいたら、なんだ、あの一、小さいタコとかイカとか、そういうのが釣りに行かれるんですよ。はい、あの一、門司とか行ったら、水がきれいだから。ほいで、航海しよる時でも、結局、タコツボをつけてですね、ほいで、つけとって、タコツボに、タコが入ったりして。自分で食べてもう。(ほかは知り合いに) 持ってってあげるんです。そしたら、喜ぶでしょ(2011年8月2日)。

艇は、これ(=ドウノマの) 中がこうえぐってあるんですよ。ほして、それをえぐられている中に石炭がない時は、(子供たちは) この中

で遊んでいる。運動場みたい。だから、真っ黒になっちゃうですよ。乞食の子みたいになってから。(石炭を) 持って行った後だから、遊ぶところないでしょう。ほしたら、幅が、艇ち通るところ狭いんですよ。これで、なんか(=石炭を) 入れるところがぐるーとなっていて、そこを子供が渡ったら、危なくないから、ここで(中略)、ブランコなどを作って、顔を真っ黒で(2012年8月7日)。

ところで、船と船の間には、「モヤイ」と呼ばれる関係で結ばれる何隻かごとの単位があった。これは、「カタクネ」(=友人) 同士とでも呼べる関係性で結ばれる数家族を表すものだった。その大部分は停泊場所を共にすることの多い、同じ会社に所属する家族から構成されていたという。船に暮らす人々は、自分の船が停泊しているところに別の船が接近してくれば、それがたとえ初めて会う人の船であったとしても、相手の船の綱を引っ張ってやり、横付けできるようにするのが普通であった。こうして、知らない人同士でもいつの間にかカタクネになっていき、互いの綱を「モヤウ」(=結ぶ) ことから、こうした関係はモヤイと呼ばれていた。危険などが迫れば互いに助け合うことから、モヤイをはじめとする船の人同士の結束力は「オカ(=陸)の人」たちよりも強かったという。同じモヤイの数家族は、年末になると糯米などを持ち寄って一隻の船のダンブロと呼ばれる船倉の部分に集まり、そこで総出で餅を搗いたという。

石橋英子さん

覚えているのは、年末に結局、親戚を呼ぶとかじゃなくて、船のモヤイの方と。モヤイでみんな合同でその餅を全部搗いて。それこそ、(中略) 父たちはドウノマチってたけど、ドウノマチに集まって、みんなでお餅搗きをして、そこで飲めや歌えよやないけどね。それがお祭り。お祭りてゆうか、お正月行事。年末よね。

そして、(餅を) みんな等分に分けるのよね。
子供とか人数に関係なく、まあ、みんなでたぶん同じぐらいのものを持ち寄ってするんでしょうけどね (2012年8月7日)。

③動物を飼う

船上生活者たちは船の上で動物を飼うことも多く、特に幼い未就学児にとっては遊び相手となってくれるものだったという。伝書鳩やニワトリ、犬といった動物を船で飼っていた家庭も多くあったのだという。

石橋英子さん

父がすごい好奇心旺盛な人だったので、まあ、沖に出た時に、いろんなトラブルなどが起こった時に、岸にその拠点を、鳩の拠点を作ってですね、連絡用にしたらいいという発想のもとに始めたんですけど。でも、結局は、鳩がもう実際住んでいる船に棲み付いているから、外で飛ばしても、どこにも行かないんですよ。だから、結果的には、あまり役には立たなかったようです。試験的にやってみて、いろいろ試行錯誤したけれどもですね、だから、船で飼うって、ペットで飼った訳じゃないんですけど。

犬も飼ってたんですよ、鳩の前に。そしたら、犬のお産と(人間の)子供のお産が一緒になったらいけないということで、犬を、結局もうすごくかわいそうなことしたんですけど。捨てに行っただけです。これいったら、泣きそうになる。妹がちょうど生まれるのと犬のと一緒にだったんですよ。結局、妹も海に落ちて死んじゃいましたけれども。

迷信なのかもしれませんが、やっぱりすごいかわいそうなことをしたと思ってます、何十年たっても。ジョンっていう名前の犬だったんです。で、伝馬船に乗せてですね、結局、漕いで岸壁まで捨てに行くんですよ。そして

ら、ずーっと追いかけて来るんですよ。すみません、この話するといつも涙がでる (2012年8月7日)。

洪田幸子さん

うちなんか鶏を飼ってた。(船の上に) 鶏小屋を作って。卵を産んだら、順番で、(兄弟の) 上から順番になんか食べさせてくれる。2羽ぐらいおったんじゃないかと思うんですけどねえ。鶏飼ってたんですね。なんか貝の殻みたいなんとかを割ってから。普段は、こう、こんな金網を作った箱の中に入れとって、ほして、(積み荷の) 石炭がなくなったら、ジョウDMA (=ドウノマの別称) に、もう放し飼いにしちゃうですよ (2012年8月7日)。

④死の危険と向き合う

船での生活は、楽しみばかりではなく、危険がつきものだった。子供たちが思わぬ事故で怪我をすることも日常茶飯事であったが、緊急事態であってもすぐに陸上の病院へ駆け込むこともできなかったため、そうした場合には船上で会得した様々な方法で対処していた。また、船上で暮らしたことのある子供たちであれば、皆一度くらいは海に落ちてしまうという事態を経験したことがあるという。さらに、まだ幼かった兄弟姉妹を落水事故で亡くしたことがあると語る船上生活者も多い。

石橋英子さん

小学校で、父親にいわれてね、お湯をこうたまたま沸かしていたらですね、荷役してる時にこう、船がバーって傾いて、そのお湯がなんかあのう、部屋の中にいた姉に、こうザーッと被っちゃったんですね。全身がこう火傷だらけになったんですけども、船にはペンキを必ず積んでいたんですね。あの、(床などの塗料が) 剥げたりした時の応急処置で。で、そのペンキをね、父が姉の火傷のあるところに、も

う塗って。そしたら、結局空気を…今の医学でいったら、空気を通さなかったからよかったんやねと思うんだけど、そしたら、ここにですね、小さな傷が1つあるだけで、もうぜんっぜん、火傷の痕がないんですよ。そう。治っちゃったんですよ。だから、その応急処置の後で、そのオカの病院に行った時にですね、よかったちいって (2011年8月2日)。

中井陽子さん (昭和10年生。元・若松児童ホーム保育士)

(昭和46年頃に保育士として児童ホームへ赴任した当時)、双子がおりましたですね。その双子がね、頭がね、髪の毛がこんだけ半分、1人あるですよ。あと全部ないんですよ。1人の子は、双子の1人の子はですね、全部丸ハゲで、そして火傷のケドロ (=ケロイド) のあれですから、つるつるでしょ、皮が。だからね、このちょっと掻いたりしたらね、皮が剥ける訳ですよ。ここが血が出る訳ですよ。(中略) だから、わたしが赤チンとかつけてやりよった。(中略) その子がね、結局、船が燃えて、火事だったですね。船底が。その時に2人の子供が這い上がってきたち、やっぱり生命力が強かったんでしょうね。やっぱしまだ生きていかん使命もあったでしょう。2人が這い上がってきて、助かったんです (2012年8月7日)。

石橋英子さん

妹は結局やっぱり、海に落ちて死んじゃったんです。小学校。小学校1年生っていう時に亡くなったんですよ。隣の船に遊びに行ってます。船がこういうふうになってるじゃないですか。で、行くところがないから、結局隣のおじさんとことかに遊びに行つて。母は、その隣の船にいて、行つてるところを見てるから、「あなた方に遊びに行つた」っていつてるけど

も、もう事故が起きて死んじゃったから、向こうの船の人は来てないっていわれる。だから、結局は水掛け論で。

電話もなければもちろん、その救急車とかも来ないし。だから、今の時代だったら、たぶん死んでなかったと思う (2011年8月2日)。

渋田幸子さん

日曜やったんですよ。で、うちも一緒に、4月から入学のふた月やったんですよ。で、みんなで遊んで、父がごはん食べる時に、5人兄弟だったんですね。で、こう頭数数えて、「1人足りん」ちて、ほて、こう名前呼んで、シゲキで弟なんですけどね、「いや、シゲキがおらんど」ってね。それから、みんなでから探したんですけどね、だから、こう船があつてですね、船が。船と船がこうぶつかつて、傷が付かんように、ペンドルっていつてですね。タイヤのようなこう板がね。そのペンドルの、こうチェーンがあるでしょう、大きな。それを、トモ (=船尾) からオモテ (=船首) に来よつて、これにつまづいて、海に落ちたんですよ。で、なかなかわからんんで。みんなで、こう、なんていうのかなあ、タコバリみたいな、こう。はい、あれですね。あれでずーっと探つたら、このズボンの裾に引っかかつて。上がつてきたんですよ。

でも、それが不思議なんですよ。やっぱこんなことあるんやろって思うんですけどね、あの、みんなたいがい一通り、そこをこう行つてくれたおじちゃんたちおるんですけどね。ものすごいその弟をかわいがつてくれとったおいちゃんが、もう、みんなが通つた後に通つて、その人に引っかかつてきたんですよ。「やはり、なんかそんなんがあるんやねえ」っていつてから。

わたしたちはそんなことなかったけど、その子だけがなんか、災難を全部被つたっていうか

な。オモテの船とか、ボートとかに、こう綱を繋ぐでしょ。その時に、こう、あれ、何ていうんですか。あっ、ウィンチ、ウィンチ。そう、ウィンチね。そう、そう。歯車があつてね。それで、父と母がこう回しよったんですよ。そしたら、その弟が、一緒になって回しよってです。そのウィンチに指挟まれて。ほいで、なんかこんなんになってですね、かわいそうだったですね。亡くなった時は、6歳ですかね。

うちは白幡の観音さんちゅうのがあったですね。こういうふうに、白い旗に、なんかこうお題目やないけど、なんか書いとんですよ。で、それをつけて、わたしの弟が海に落ちた時ですね、それを、なんか父が一所懸命お願いしてから、流して、すーっとう流してきて、ちょうどすーっと静かに沈んでいったんですよ。その白い旗が。やったら、そこに（弟が沈んでいた）。うん、ちて、だからそんなの、あるんやろねっち、思った（2011年8月2日）。

田上キサ子さん

わたしなんかも、落ちましたよ、1人、亡くなったんです。ミチノリっちって。落ちた訳ね。その上をなんていうんですかね、（オキウリの）モーターのあれする伝馬船みたいなのに、バーっちで巻き込まれて、ほで、沈んでしまったんです。だけど、その浮き上がってきたら、もう助かったんやけど、気がつかなかった。浮き上がったところに来て、モーターで、またブーっちって、下に、今度は下に深く沈めてしもうて、ほいで、浮き上がった時は、もう。それで、新聞にもものったんです。それで結局、もう警察も来てね。ほいで、もう、（弟を沈めた人は）これそこに住まれないようにして、どっか引っ越していったけど。そんなことがあった。4歳ぐらいで。はい。だから、もうあと2年ぐらいしたら、もう兄ちゃんたちとかね、あんなところに、上に、オカに上がられ

るけど、オカにね、学校行かれると喜んどったんですけど。そういう状態で。（弟の）お墓とかは、今（両親の出身地の）熊本にあります（2011年8月2日）。

（2）若松児童ホームへ

①両親との別れ

子供たちの安全性確保や通学の利便性を考えて昭和4年に造られたのが、若松海員児童寄宿舎であった。ここは戦後に若松児童ホームと名称を改めたが、昭和48年頃までの長きにわたって、両親が船上生活をしていた就学児童たちを受け入れる施設として機能してきた。小学校4年生の時に姉と弟と共に若松児童ホームに入ることになったという洪田幸子さんにとって、両親と離れるのはとても辛いことだったという。

洪田幸子さん

（わたしは）1年生の、1年生は古前小学校で入学して、それが終わって、1年生の3学期ぐらいから広畑に行って、小学校3年終わるまでおったんですかね。で、4年生がまた古前小学校に来て、わたしの担任の先生がものすごくいい先生でですね、その先生ももう苦学生で、いつも学校に軍服を着て、こう来てましたよね。着替えがなかったんでしょうね。わたしが「もう親がこんなんしてから、児童ホームに入る」ち、いいよるってゆうと、「自分のところにね、下宿させるけん、入るな」ちゆうてくれたんですよ。でも、「ほかの兄弟ももうみんな入るから、わたしだけね、先生のところにお世話になる訳にはいかんで」て、入ったんですけど。で、児童ホームは4、5、6と（中学）1、2、3と6年間。

なんてゆうかね、もう、今生の別れみたい、こうホームに来たら、2階にベランダみたいのがあるんですよ、玄関に。そこからずーっ

と泣きながら、(兄弟) 3人で親が帰ってしまうのを見よったですね。で、夜になったら、そのベランダに出てから洞海湾の方を見てですね、3人で泣きよったですね(2012年8月7日)。

で、はじめこそなんかもうわたし、あその玄関に行ってから、洞海湾見て泣きよったけど、慣れるね(2011年8月2日)。

②毎日の暮らし

子供たちは、入所したばかりの頃には辛い思いをしたというが、次第に児童ホームでの生活に慣れていった。児童ホームで子供たちが経験したのは、起床の鐘で始まり、9時の消灯の鐘で終わる集団生活だった。各部屋では男子と女子とに分かれて10人ほどが一緒に寝起きを共にしており、下級生は室長となる上級生の言うことを聞かなければならぬという上下関係ができあがって、食事の時に上級生からおかずをとられる下級生も後を絶たなかったという。渋谷幸子さんよりも前に児童ホームへ入った子供たちに出されたのは、決まったグラム数のごはんを分けてもらう「ハカリメシ」だったと聞いたことがあるという。さらに子供たちは、中学生になって給食が出なくなると、食堂のおばさんに作ってもらった弁当を皆と一緒に学校へ持って行ったものだった。ほかにも、児童ホームでは芋の入った蒸しパンなどを毎日3時のおやつに用意してくれていた。児童ホームのおばさんたちは、下校時間の遅い中学生たちのためにもきちんと確保しておいてくれたのだという。

佐々木偉昇さん(昭和11年生。元・若松児童ホーム保育士)

(児童ホームの子供たちは)朝は6時半の起床です。そして、7時の食事ですね。そして、お掃除をして。先に起床してすぐ洗面をすまして掃除。食事、で、あとは学校に行くようにしてね、学校は近いんですけどね。で、用意して

学校に行って、帰ってくるのがまあだいたい、1年生は午前中で帰ってきましたけど、高学年になるとだいたい3時過ぎ、中学生になるとだいたい5時、それで18時食事です。18時の。(もとは)17時30分でしたよね。それがちょっと早いんじゃないやろかと検討したんです。そしたら。結局、調理の職員の後始末をして帰るのに8時になるんですね。だから、そこらへんがむつかしんですね。なかなか5時半を6時にできなかったですね。それで、おやつが3時で、(3時に)まだ学校から帰っていない子は夕方の7時過ぎにおやつを出して、で、だいたい小学校はもう9時の消灯ですね。中学生は10時まで、で、(赴任した昭和36年頃の)当時はテレビがやっとありましたかね。テレビ見るのもちょっと珍しいぐらいでしたけれども、そういう繰り返しですね。私はもう中学生のところへ行って、中学生はやっぱりいろいろ話をしたいだろうから、一緒に中に入ってやったり寝たり。話は好きですからね、子供たちは(2012年8月10日)。

田上キサ子さん

(児童ホームの部屋は)畳やったからですね、ほで、机があって。(中略)ほで荷物入れるところもちゃんとあって。一部屋がねえ。(中略)十二畳ぐらいのところに、…10人ぐらいですかねえ。うん、ほで、お布団入れるところがあるから、そこにお布団入れて、ほで、机を全部、こうしてずらーっと並べてあるでしょう。だから、これを向こうのほうに寄せて。そして、そこにお布団ひいて、あ、寮生活みたいなもんでしたね、はい(2011年8月2日)。

石橋英子さん

児童ホームの時の思い出といえばですね。100人ぐらいの人が一緒に、こう食事するじゃないですか。当時ですね、まあもちろん、その

年代によって。たとえば急に、なんかいなかったり120人になったりするんですけどね。私なんかの時は、100人ぐらいですね。120人ぐらいいた時もあるね。で、食事をこう、全…全員でするんですよ。その時にですね。こう、先輩たちがこう、好きなおかずとかあったりしたら、ね、「それちょうだい」とかいうんですよ。そしてですね、「や、これやらん、好きだからやらん」っていうと。すぐいじめられよったんですよ。ははははは。(2011年8月2日)

洪田幸子さん

弁当は入れてくれよったけど、ごはん、麦飯のごはんにウィンナーソーセージ。ウィンナーソーセージじゃない。ほら、あるでしょう。あれ(魚肉ソーセージ)を切って、しおこぶを入れとんですよ。で、学校に行って、お昼開けたら、もうそのごはんもソーセージも真っ黒なとんですよ、しおこぶで。てんぷら、こうあったら、半分こうなととんですよ(2012年8月7日)。

こうして集団生活を送る子供たちの間には自然と派閥のようなものができあがっていった。陰湿ないじめが起こるほどという訳ではなかったが、上下関係や派閥ができるのには家庭が経済的に豊かか否かといった親同士の関係が多少は関係していたかもしれないのだという。そうした関係性があった一方で、皆小さな頃から生活を共にしていたため、互いのつながりには今でも深さを感じることも多いという。

石橋英子さん

で、一番嫌なのはね、お風呂が、男の子が先に入って、女の子は常に後なんです。だから、わたしは絶対それはおかしいって言って、異議を申し立てて。男の子と女の子を交替に入るようにしたんですよ。(寮で世話をしてくれ

る)おばちゃんからね、とっんでもない子だって。こーんな子は、今までおらんやったって(2011年8月2日)。

洪田幸子さん

こうなんですよ。(子供たちの派閥には)力関係と、もう1つは物質的なことですよね。そやけ、親がちょっとお金持ちの人がおるんですよ、やっぱり。同じ解の人でもね。ほたら、その親が金持ちの、ま、2人おったとしたら、この2人がこう、そやけ、その親が来た時に、お菓子とかこう、たくさん置いて帰るでしょ。そしたら、それをほかの人に陰でこそともらう。ほしたら、その人、こうついとかないけない。なんかそんなんがあったね。派閥が生まれる理由がそうやったと。ねえ。1人が万年筆を買ったら、1人が買う。負けんように。ほかの人はそんなもん手も出らんけ、黙っとるけど。(2012年8月7日)。

③船への「帰宅」

土曜日に学校が昼までで終わると、両親の船が若松の近くに帰ってきていれば子供たちの多くは船へと帰ることができた。岸壁では石炭を船に積む作業が行われており、子供たちはその大音量の中で両親の乗る船を呼ばなければならなかった。小さな子供たちにとって、力仕事をするおじさんたちの目を気にしながらありったけの声を出して船を呼ぶのは、なかなか勇気の要ることだったという。

田上キサ子さん

土曜、1週間に1回はあの一、あれだから。(中略)船に帰るんです。その時に、こんな、あの棧橋とかで、あの船の名前を呼ぶ、その時はやっぱ、娘の頃ですから、恥ずかしかったですよねえ。おーいおーい、っちっていわないといけないんですよ。それが恥ずかしくてです。ね。茂丸っちって、いうの。

ほんだらですね、(栈橋の) 上でからですね、なんちゅうの、石炭ゴンゴンゴンンちから、叩いて船に載せてるんですよ。栈橋から。ほしたら、(中略) もう、やっぱ帰りたくないなと思いながらも、やっぱり帰りたいから、大きな声でおーいって、船の名前呼んで、おーいっちいわないけん、もう聞こえないんですよ、(声が) 小さいから。おーいって。しまいには、もう4回ぐらい呼んでも、全然わからないから。もう、わたし帰るっちゅうて、ははは、帰りよった。したら、おじちゃんが、オレが呼んでやるって、中元(＝田上さんの旧姓) さーん、あんた娘さん帰って来とるよーってゆうて、ほいで、あ、そうですかいって、ほいで連れに来てもらって、それやっぱ恥ずかしかったですね。それを中学2年になっても3年になっても、やらなきゃいけなかったんですよ。やっぱそれ、恥ずかしいっちゅうか、やっぱいやだったですね。

(どうしても声が届かない時には児童ホームに) 戻るんです。しょうがない。あとは、もう、帰ってきたんだねって。うん、帰ってきた、聞こえんからって。ほんで、「すみません」っちゅうて、「おばちゃん、あの、食事いいですか」っち。だから、食事を、もう(船に) 帰る時は、「食事いらないから」ちゅうて、帰るんですよ。で、帰ったらお腹すいたまらないから、「すいませーん、おばちゃん」って恥ずかしいけどいったら、「もうあんたも今頃帰ってきて、もうごはん片づけてしまったからないよ」っちって。でも、まだ野菜もんとか、いろいろまだ作ったのあればあるから、それでなんか作ってあげようっちって(2011年8月2日)。

④周囲からのイメージ

児童ホームに入所しているというと、あまり馴染みのないオカの人たちからは経済的に恵まれない子

供たち、あるいは素行の悪い子供たちとの印象を持たれていたことを、子供たちは肌で感じていたのだという。

石橋：でも、あの一、やっぱり児童ホームに入ってた人たちって、貧しい子みたいに思われとったやない。あの頃ではね。

渋谷：戦災孤児とか、なんかね。

石橋：そうね。

渋谷：あの一。悪いことをしてから、なんていうんですかね。少年院？　なんか、そんな感じを持とったやろ？

石橋：イメージ的にはね。

渋谷：ほやけ、施設っていう、その施設じゃないけど。家なんですよ。ホームなんですよ。

石橋：恵まれない子供やん？　わたしたち。はっはっはっはっは(2011年8月2日)。

田上キサ子さん

まあ、(自分たちは児童ホームに) 預けられたりしたけど、まあ、「両親がいるからいいじゃないか」ち、いわれたこともあるんですよ。だから、両親が帰ってくるしね。「(両親と) 一緒に住んでないから、かわいそうであるけど、それもいいんやないか」ち、いわれたこともある(2012年8月7日)。

⑤子供たちの楽しみ

周囲からの眼差しがどのようなものであったにせよ、児童ホームでの暮らしは、子供たちにとって、贅沢で楽しい思い出としても残っているという。とりわけ、児童ホームに暮らす子供たちにとって何よりも楽しみだったのは、招待されて西鉄ライオンズの野球選手に会いに行ったり、海水浴に出かけたりすることだった。石橋英子さんはある年、野球選手に会うために小倉市民会館へ出かけたのだが、それは初めて水洗トイレを目にする機会でもあったとい

う。

田上キサ子さん

あの頃はピアノもあったし、あのなんていうんですか、あの、卓球でも、ああいう遊び道具はやっぱり、普通の人よりかわいいのが、また普通の家庭の人では、上流の人が持っておるぐらいいの、そういうことはパレーとか、あんなんとか、なんでも遊び道具はちゃんと、あれしであつたから。そういう方面は、幸せやったです。(中略) クリスマスとかあの時には、あの、あれ、ちゃんとしてもらってですね。ケーキとか、ちゅうたらおかしいけど、それなりの立派な、今時の丸いこんなのとは違うけど、やっぱり、そんなのして、お菓子とかですね。サンタクロースの人が来て。プレゼントもらったり、だから、そういう日常生活のあれは結局、贅沢させてもらったですね。だけど、やっぱりさみしさっちゃうんはあったですよええ (2011 年 8 月 2 日)。

石橋英子さん

そしたら、その時 (=小倉市民会館へ行った時) にですね、そんな話はまた別の話なんですけど、水洗トイレでゆうの児童ホームではなかったの、初めて使ったわけなんですよ。そしたら、トイレに行って、水洗を流したらですね、もちろん、水が止まらないんですよ。で、止まらないから、壊したか思うて、何回も押したんです。ずーっと止まらないから、そこにいと、先生が「もう会が始まるんやけど、英ちゃん、どこにおるんね、どこにおるんね」で、大きな声で呼んでから、すごい恥ずかしい思い出がある (2012 年 8 月 7 日)。

(3) 若松児童ホームを出て

中学校を卒業すると、子供たちは児童ホームに居

続けることはできなかった。そのため、船へ戻って両親の後を継ぐ準備をしたり、児童ホームを出て住み込みの仕事を探すなどして社会へ出て行く子供たちが多かったのだという。

洪田幸子さん

わたしは、そやけ、とにかくその学校ちゅうもんに行きたかったからですね。そやけど、(児童ホームに) 高校生は置いてくれんし、親は船やから、船から高校に通えんから、理容学校に行っただすよ (2011 年 8 月 2 日)。

住み込みで。もう今、とてもきつかったね。今思ったら。厳しかったから。今やったら勤まらんでしょうけど (2012 年 8 月 7 日)。

田上キサ子さん

わたしは勉強が嫌いだったから、そのそうゆうふうにはしなかった (=高校へは行かなかった) ですけど。今度はですね、伊藤商店ちゅうとこですね。(中略) あのー、裏のほう、お手伝いさんみたいにして 5 年間ぐらい働いて。そして、今度、5 年したらですね、あそこに 13 人ぐらいおったんですよ。ほしたら、なんていうんですかねえ。会社のほうの、使い走りですね、あのー、銀行行ったり、それからこう、書類を門司まで取りに行きなさいっていったら取りに。そういう仕事をしながらこんなんして。そしたらですね、(中略) 昼間に行きなさいって、習い事させてもらったんですよ。いろいろ。お花とかですね、それから編み物とか洋裁とか、そういうこの学問も大切だけど、あの、そういうこと身につくことも大事だから、つけなさいちゅうて、それはしてくれました。

男の人だと、やっぱりほら、お父さんがやっぱり船を持ってるところの子供たちは、あれはお父さんが年があれだったから、その後、食べていけない時やったら、今度は子供さんが

後継がないといけないでしょ。そうして、あの一、お父さん後継いだ人もいます。私かたも、中学校卒業して、(2人の)弟は船乗ったんです(2011年8月2日)。

2 節 子供たちの寄宿舎生活

(1) 若松児童ホームでの生活

児童ホームにおける生活の概略は、以下の通りである。最初に、保育士であった中井陽子さんの話から児童ホームの創設に関する経緯を追ってみることにしよう。

若松児童ホームは、子供たちを海の事故から守るため、石炭商であり船の所有者である牧野さんが尽力して開設された。部屋は20畳ぐらいの広いもので、1つの部屋に10人ぐらいが入室した。小学校1年生から中学生までの児童が縦割りと一緒に入っていた。勉強も寝るところも同じ部屋であった。行事としては、誕生日会やクリスマス会、卒園式などがあり、その日は特別なご馳走が出た。海水浴もあり、現地で簡易トイレを造ったが、その際は岡田商店など地域の人の協力があつた。そこでは、児童ホームの活動をサポートする地域住民の存在が不可欠であることが強調される。

次に、入寮児童の立場から語ってくれた洪田幸子さん、石橋英子さん、田上キサ子さんの話にもとづいて、児童ホームの生活の一コマをうかがうことにしたい。

食事は100人ぐらいが一緒に摂った。石橋さんは、このことが真っ先に思い出されるという。ときには、おかずの奪い合いもあり、先輩の申し出を断るといじめられたこともあったらしい。しかし、陰湿ないじめではなく、からかい半分のやり取りであったようである。その2人が今でも親友として付き合っていることが、それを証明している。石橋さんは、その食堂で繰り広げられた微笑ましいできごとを雑誌『ふだんぎ』⁽¹⁾で紹介している。また、食事に関して

は、自分たちの代にはなかったが、以前には「ハカリメシ」(計り飯)といって、カネに入れたご飯を秤で計り、「何グラムと計って、おかわりなし」という食事の方法があったという。「やっぱり児童ホームに入ってた人たちって、貧しい子みたいに思われとったんやない? あのころはね」と石橋さんは振り返り、「震災孤児とか、なんかね、そんな感じもとったやろ」と洪田さんも同調する。この感覚について、田上さんは「それはなかったですよ。わたしらはなかったです。そやけど、やっぱしなんていうんですかね、児童ホームだから、それに入っとるねえ」とかいって、「児童ホームだから、お母さんたちと一緒に住んでいないからとかで、いわれたことはあるけど。そやけどですね、わたしはそういうことに対しては、自分ではなんも思うたことはないです」と、話者によって多少温度差があることが分かった。田上さん自身は引け目を感じなかったが、他人がそのように見ていることはうすうす感じ取っていたようである。

風呂については、男子が先に入って、女子は常にあとで入る決まりであった。それに対し、石橋さんが異議を申し立てて、交代で入るように改善した。「女子が先に入浴するなど、聞いたことない」と係の方に意見をされたようである。当時の男女の立場のあり方に疑問を呈して、それを糺そうとする姿勢が伝わってくる話である。児童にとって辛かったできごとの1つは、土曜日の午後に帰船しようとして帰れなかったことある。海岸で作業をしている自船に大声で呼んでも、全然聞こえないので、児童ホームに引き返してきたという話は、入寮経験者の複数の方からうかがった。近くで荷役の作業をしている人が大声で呼んでくれるが、それでも聞こえないときがあったという。何よりも、年頃の娘さんであるから、恥ずかしくて仕方なかったと振り返る。その場合、児童ホームへ引き返すより手立てがないが、ホームでは賄いの方が、余った材料で食事を作ってくれたという。1週間に1度の帰船の楽しみも、海上の自船に声が届かないことで断念しなければなら

ない無念さと、児童ホームに戻って食事を用意してくれた賄いさんの心意気が伝わってくる。

1年のほとんどを船上で暮らす形態は、江戸時代にも「家船」と呼ばれる海の民によって行われていた。瀬戸内海や肥前国・現 長崎県などの「家船」の存在が知られている。⁽²⁾その「家船」では子供を含む一家族が船の上で暮らし、良好な漁場を求めて移動した。「家船」と近・現代における洞海湾の船上生活者との違いは、まず、「家船」が漁業を生業としたのに対し、洞海湾の船上生活者は、石炭を始めとする諸物資の運送を主たる生業としていた点であろう。また、「家船」は、瀬戸内海の事例でいえば、能地や二窓（安芸国・現 広島県）などのように根拠地をもっていたのに対し、洞海湾の船上生活者は、陸地には家を構えず、1年中、船の中で生活していた点が大きく異なる。その意味では、1年中海上で暮らした洞海湾の船上生活者の方が、文字通り「家船」と呼ぶに相応しいといえるかも知れない。もう1つ、両者のあいだには決定的な違いがある。それは、江戸時代には子供の教育という観点はあまり重視されないが、近代以降では義務教育が制度化されたことから、船上生活者の児童に対する特別な教育制度を創設する必要があったことである。そのため、教育面では、「家船」にはみられない特徴を洞海湾の船上生活者は有していた。

当然ながら、石炭産業の発達にともない、洞海湾の船上生活者が増加すると、舩や機帆船を住まいとする船上生活者の子供たちの通学問題が浮上してくる。この問題を解決するため、当時の若松市⁽³⁾は、1929年、若松石炭商同業組合、筑豊鉱業組合⁽⁴⁾から2万円の寄付金を受け、総工費33,000円で若松児童ホーム（当初は、市立若松海員児童寄宿舍。⁽⁵⁾1946年改称）を建設した。古前小学校の隣に建設用の敷地を求め、同年1月に工事に始まり、6月には収容定員120名の施設が完成した。その設立主旨は、『若松市史』⁽⁶⁾に詳しく述べられているので、一部を要約して記してみよう。なお、原文は注に掲げているので参照されたい。

若松港には常時繫留している船が2,500艘余もある。船内で暮らす生活者も8,500人をくだらず、就学児童は200人以上を数える。また、船員の多くは「伝統的職業」であるため社会との接触が少なく、文化の恩恵をうける機会も限られる。したがって、「比較的低級」にして子供の教育に対する観念が薄く、子供の学業成績はきわめて不良である。その上、こうした児童のための施設がまったくなく、「荒天雨雪」のときは通学が困難となる。それだけでなく、船の繫留場所が急に変更されるので、子供たちは帰船できず、警察の助けを借りて、やっと居所が確認できるといった状態で、日々の通学に支障を来している。このような理由から、児童寄宿舍の建設が急務であると考える。

船員の多くが「比較的低級」で、子供に教育を受けさせる観念が薄いため、成績が不良であるという指摘は、必ずしも正鵠を射ているとは思われない。陸上に住む人たちは、こうした評価をくだしがちであるが、それは、陸上に生活の場を置かない暮らし方を特別な目で見ようとする日本人の古くからある捉え方であるといえる。船上生活者の渋田さんは、20歳のときのできごととして、地元メディアの取材に対し「成人式のあと、家路につく姿を取材したいとの地元メディアの申し入れを断ったが、今なら取材を受けることができるかも知れない」と語ってくれた。そのときの記者は、あでやかな振り袖姿の女性と、その帰る先が船の上というギャップの大きさを狙って取材したものと思われる。これも、陸上に生活の拠点を置かない人々に対する見方と共通するものがある。船上生活者は、自分たちの生業に最も適合した形で生活していたのであり、陸上に家を構えることは、日々、海まで通わなければならない点からも不合理であった。ただ、通学に関しては、確かに不便であったのは間違いない。いずれにせよ、授業の遅れや通学の困難さを解消するために、全国

に先がけ、若松市が児童ホームを設置したことは大きな意味があった。また、海の事故から子供を守るという面でも大きく寄与した。

児童ホームは、木造 2 階建てで、事務室、応接室、娯楽室、病室（現在の保健室）、舎長室（現在の園長室）、保母室、児童室（6 室）、食堂、浴室などを備え、総面積は 172 坪であった。定員は 120 名（小学校・中学校児童）であり、職員は舎長（現在の園長）⁽⁷⁾ 1 名、保母 2 名、炊事夫兼小使 2 名である。児童の入退寮状況は、表 5-1 で示す通りである。

表 5-1 児童の入退寮状況

（単位：人）

種別	入寮人数			退寮人数			年末・年度末人数		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1929年	56	55	111	8	6	14	48	49	97
1930年	30	30	60	20	25	45	58	54	112
1931年	32	21	53	33	38	71	57	37	94
1932年	34	35	69	32	22	54	60	49	109
1933年	38	34	72	35	23	58	60	48	108
1949年			50			9			41
1954年			22			34			84
1959年			25			16			88
1964年			31			33			87
1969年			17			18			74
1972年			33			18			59
1973年			23			17			69

注 1) 表中の 1929～1933 年は『若松市史』後編 679 頁に掲載の表を、また、1949～1973 年は『若松児童ホーム創立 60 周年記念誌』の表をそれぞれ利用して作表した。なお、「年末・年度末人数」の欄は、前者が「年末」、後者が「年度末」で集計されている。

注 2) 計算違いと思われる箇所もあるが、ここでは原本の数字をそのまま掲げた。

同表によれば、開設年の 1929 年には男女合計 111 名が入寮し、そのうち 14 名が退寮している。したがって、年末人数は退寮人数を差し引いた 97 名となる。2 年目以降は、入寮人数が減少しているものの、年末人数はどの年も 100 名前後を数えて大差ない。120 人の定員に満たないのは、何らかの事情で途中退寮する児童がいるからであろう。むしろ、船の増加とともに、収容しきれない児童がほかにもいたものと考えられる。そのことを裏付けるように、1932 年には、若松港船舶保安組合から市長に請願書が出されている⁽⁸⁾。そこでは、児童ホームの設置を「御仁政」と感謝した上で、児童ホームでは「小学生」は 100 名しか収容できないのに、300 名の該

当者がいること、1 人当たり 4 円の食費を親が出せないで退寮する者がいることを訴えて、施設の拡充を願い出ている。

表 5-1 の 1949 年以降はほぼ 5 年ごとの人数を掲げたが、この間、いくつかの変遷があった。1949 年には児童福祉法に基づく養護施設として認可され、児童定員は 98 名となった。さらに、1955 年 10 月には若松児童ホーム運営委員会が設置され、1958 年 4 月には社会福祉法人の認可を受けた。1971 年 4 月には、海上生活児童と一般養護児童の混合入所が開始され、翌 1972 年 4 月には定員は 80 名となった。1973 年 4 月に至って、船上生活者の児童の入寮は完全に終え、一般養護児童のみの施設となった。以後、定員 80 名（2～18 歳）の一般養護児童施設となり、現在に至る。とくに、1965 年の港湾労働法の公布が船上生活者に及ぼした影響は大きく、子供たちもそれまで慣れ親しみ、辛苦をともした児童ホームの生活に幕を下ろすことになった。

（2）若松児童ホームの教育方針

1961 年から保育士となった佐々木偉昇・和代さんご夫妻の話から、児童ホームの指導方針を探ることにしよう。佐々木偉昇さんは、就任直後の 3 年間、児童ホームに住み込んで指導にあたられた。また、妻の和代さんも 1963 年、64 年の 2 年間、同じ目標のもとに指導されている。

佐々木さんが住み込んで指導した背景には、次のような考えがあった。現在の福祉業務における児童と職員の比率は、5 対 1 の割合、つまり、子供 5 人に対して職員が 1 人となっているが、児童ホームに勤務し始めた 1961 年当時は、それが 10 対 1 の割合であった。「非常に福祉は十分でなかった」ので、8 時間勤務では、職員がだれもいないといった事態が発生する、それで、泊まり込むことになった。「当時は、当たり前」と思っていたが、一緒に生活してみ、子供たちの現状がよく理解できたという。

佐々木さんの教育理念で最も注目されるのは、教

育の三位一体説というものである。就任中に、ホームの親たちによってPTAが作られた。その会合には、1カ月か2カ月に1回は必ず出席した。それと、「わたしもまだ若かったから、叱っていましたからね」。すると、PTAの方から「叱りすぎじゃないか」と怒られたことがあったという。小学校の高学年から中学校に入っていく時期であったから、反抗的になっていたのを叱ったところ、そのような注意を受けたのである。「あの先生はこう押さえた」と子供は親に都合のいいことを言うので、「そりゃ剣幕は凄かったですよ」と振り返る。「お前どうして、おれんとこの子を」といって、若松弁はとくに厳しいので、圧倒されてしまったようである。こうした経験から、教育で一番大切なことは、子供とのコミュニケーションであると説く。説得の基本は何かというと、「やっぱり思いやりと心の温かさ、そして、それが心にあるプラスを形にして子供に伝えてやらなければ、子供は分かりませんから」と、コミュニケーションと愛情、そして、それを子供のプラスになるような形にして伝えることの重要性を強調する。

そして、子供もAからZまでさまざまであるから、彼らは全員が違うように受けとる。だから、ケースバイケースで話してあげなければならないという。その点が一番むずかしいところで、とくに、船の関係では親にもきちんと説明する必要がある。「やっぱり三位一体、わたしゃよく三位一体というんですけど。子供とそれからご父兄の方と職員の連携がやっぱりうまくいってないと、三位一体はくずれるよ」と、職員にもよく伝えていたという。このように、自説を展開して、児童、親、教職員の三者が連絡を密にして、互いにコミュニケーションをとることの重要性を力説するのである。PTAとの会合では、職員に対する要望が非常に多いので、一体、船上での生活がどのようなになっているのか知りたいため、山本さんという方から「1回うちに来てみませんか」と誘われたのを機に、船に行ったことがあった。細い橋を渡り、船から船へ移って船底に降りる

と、そこが部屋になっていて、食事もいただいた。その部屋で一緒に寝起きすることが分かって、「子供にとって果たして環境的にはどうなのかなあ」と、考えさせられる点があったという。

次に、佐々木さんの教育方針は、児童に対してだけでなく、親にも向けられた。児童の親は、着飾ることより、食べ物にもの凄くお金をかけていた。船に呼ばれたときも、「もう本当にご馳走」で、予算のことを考えると、心配になるくらいであった。それでも、子供たちの中には「こんなもん食えるか」という者もいるので、驚いてPTAに相談したが、食べ物にお金をかけることは、すぐには改められなかった。ハレの日の運動会のときにも、首をひねるような光景に遭遇した。母親は、運動会にこのときとばかりご馳走を作ってくるが、仲間たちだけで「そこはホームやけ」と、他人を排除して1つの場所に集まってしまう。それでは、コミュニケーションが取れないから、小学校の先生に全部区分けした中にそれぞれを入れて欲しいと願い出たことがあった。しかし、先生にもいろいろな考え方の人がいるから、これもすぐには解決しなかったということである。

さらに、運動会に着てくる服装についても、苦言を呈することがあった。親たちは、豪勢な弁当を一生懸命作ってくるが、服装はドテラみたいな、船の生活のままでやってくる。だから、他人からすれば、「あっこはね」となる。決して着飾った服装をしてくる必要はないが、普通の服装で来て欲しい旨を伝えたことがあった。PTAから「そうやな、佐々木という通りや」と声が上がるようになり、「だいぶモダンっていうか、変わってきましたよ」とその成果があったことを実感されている。決して高価なものを着る必要はないが、普通の服装で来て欲しいという要望が実を結んだのである。

佐々木さんは、最後にこう締めくくる。「子供って、今、船に限らず、子供たちってもの凄く可愛いんですよ。もう一言でいうと、それで純粋ですよ。むしろ、親がいることによって、彼らはまだいいな」と思い、「あとからうちも一般養護が入ってきたと

きに、それをつくづく感じましたけどね」と、子供の純真な気持ちを大切に思うことと、船上生活者の児童と一般養護の児童のそれぞれ置かれた立場の違いを思いを込めて話された。

この点については、中井さんが、同じような感想を述べている。

船上生活者の子供は、親が大事に育てているから、おっとりしている。毎日一緒に生活していなくても、親が愛情を注いでいるから問題はないといって、「親の愛というのは大事ですね」と実感を込めて語られる。「船の子供は親が迎えにきて親と一緒に帰るんですよ。こっちの子供は、親のいない子供がおり、指をくわえるというのか、そんな感じで帰るのを見ていたですね」という。「養護施設の子供は、自分の寂しさと、これからどう生きていこうかと思っている、子供がね。将来のことも」と、自分たちには分からないが、彼らが寂しさをこらえて必死に生きていることを見守ってやりたい、という気持ちを吐露してくれた。「わたしたち職員がそういうところを理解してあげないとね」と、職員の指導のあり方を説かれる。「こう、こう、こう」という指導よりも、やっぱり心の指導というのが大切であると述べる。「だから、一人ひとり、段階的にね、画一的な指導ではなく、やっぱり、集団になると画一的な指導になるんです。なあ、なあ」と、それでは、養護施設では指導できないという。一方、「船の方は、土、日に帰れるので、養護児童の寂しさと比べると、た

とえ、土、日の週末しか帰船できなくても、船上生活者の児童は、親の愛情を受けているから、みんな幸せな子供でしたよ」と語られるように、その境遇には大きな開きがあった。養護児童の立場や環境を理解することで、船上生活者の児童の性格もまた浮き彫りになってくる。前述したように、船上生活者の船内居住が認められなくなった1965年の港湾労働法の施行の影響もあって、1973年に船上生活者の児童の入寮はすべて完了することになる。このような指導を受けた多くの船上生活者の子供が、児童ホームから社会へ巣立っていったのである。

ところで、船上生活者の児童の施設は、若松児童ホームだけではなかった。ほかにも、船上生活者の子供たちの施設が八幡や門司に開設された。八幡の児童ホームは定員30名、門司の門司ヶ関学園は定員70名であったが、八幡の児童ホームの開設が1962年ごろであったように、両施設とも若松児童ホームよりずっと後にできたものである。120名の収容能力をもつ若松児童ホームとは、その開設時期においても収容規模においても大きな差があった。また、若松には若松児童ホーム以外にも、厚生寮（正式名称は若松船員厚生寮）といわれる施設も存在した。これは、若松児童ホームに入り切れない子供たちや、怪我、病気で就業できない船員たちを一時的に収容する施設として設けられたものである。さらに、暁の鐘学園などの施設もあり、教育的見地からもその施設との交流を重視した。

【注】

- (1) 石橋英子「寮生活」（ふだんぎ北九州グループ『ふだんぎ 北九州』13号所収、1991年）120頁。同「“児童ホーム”での生活」（つくしグループ『つくし』2号所収、1993年）78～80頁。
- (2) 河岡武春『海の民 漁村の歴史と民俗』（平凡社選書104、平凡社、1987年）47～50頁。羽原又吉「漂海民」（岩波新書〈青版〉504、岩波書店、1963年）105頁、150頁。「家船」に関する先行研究は分厚い蓄積があるが、ここでは、2書を紹介するにとどめる。
- (3) 若松市役所編『若松市史』（1974年（1937年初版の復刻版））後編8頁や、家次寔「若松市」（2006年）に収録された「若松年表抜粋」を参考にしながら、若松の行政区域の沿革を示すと次のようになる。江戸時代の若松村は、1889年の市町村制施行により新たに若松村（若松）となった。その後、若松・修多羅の両村を合併して若松町と改称された。1906年、さらに石峰村（小石、藤木、二島のうち3大字）を合併し、1931年、島郷村（二島、小敷、頓田、安屋、有毛、小竹、畠田、竹並、浅川、蟹住、乙丸、大鳥居、塩屋、高須、弘川）を合併した。1914年、市制施行により若松市となり、石井良一が初代市長に就任した。さらに、1963年、若松、八幡、小倉、門司、戸畑の5市が合併して北九州市が誕生すると、旧市はいずれも区政をしき、若松市も若松区となって現在に至っている。

- (4) 玉井勝則編『若松港湾小史』（若松港汽船積小頭組合刊、1929年）45～46頁によれば、若松石炭商同業組合は、石炭の検量、荷役の改善と不正取締りを主たる事業として、出入船舶の保護および通信交通機関の改良を目的に、同業者間で紛争が発生したとき仲裁を行う団体として組織された。同組合は、1885年福岡県布達に基づき、若松港石炭屋組合として発足した。1900年、組合地区を戸畑町、石峰村まで拡張し、組合名を若松石炭業組合と改称した。さらに、同年、重要物産同業組合法の発布にともない、若松石炭商同業組合と改称し、組合区域を八幡、黒崎、折尾に拡張して根本的に組織を改めた。創立当初の組合長には、安川敬一郎が就任した。一方、筑豊鉱業組合は、採炭事業に関する諸般の改良進歩の考究、石炭販売の共同利用の保護、石炭運搬の便宜と取締方法の議定を目的に、1885年福岡県布達石炭鉱業人組合準則によって組織されたものである。当初は、遠賀、鞍手、嘉麻、穂波の4郡（筑前国）と田川郡（豊前国）でそれぞれ組合を設置したが、同年、各組合が連合して1つの団体となり、翌年、若松港に筑豊五郡鉱業組合取締所および石炭一括販売所を設立することになった。その組合総長には石井寛平が就任した。
- (5) 『若松児童ホーム創立60周年記念誌』（社会福祉法人若松児童ホーム記念誌編集委員会、1990年）。
- (6) 前掲（3）『若松市史』677～678頁。本文中では要約して記述しているので、読点・中黒を付した正文を掲げておく。
- 若松港には常時繋留せる船舶式千五百余隻を算し、船内の生活者八千五百人を下らず、就学児童亦三百人余に上れるも、船員の多くは伝統的職業にして社会との接触少く、文化の恩恵に浴せざる関係上、比較的知能低級にして子供教育の念薄く、就学成績極めて不良なり、加ふるに之等児童の為何等の施設あらざるを以て、荒天雨雪の場合は通学頗る困難なるのみならず、急遽繋船場を変更して帰船不能となり、警察当局の救助に依り辛うじて其の居所を知り得るが如き日常通学の不便実甚しく、茲に於て児童寄宿舎建設の急務なるを痛感するに至り……
- (7) 前掲（3）『若松市史』後編678頁。
- (8) 芳野敏章「若松今昔ものがたり一懐かしき日々の輪舞曲（ロンド）」（西日本新聞社、1996年）25～26頁。